

現状は下部が欠損しているが、かなりの長さを有した木簡と思われる、その上端部のみは物品名を記載した付札木簡と考えられる。類例として、金沢市西念・南新保遺跡出土木簡「須留女×」(二八五×二三×七)があげられる(金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』一九八九年)。内容については、物品が何を意味するのかが今のところ判然としない。時期もまた、第一二号溝内の出土遺物が古墳時代後期から平安時代の土器(主体は七世紀後半～八世紀前半)を混在しているため特定することは困難である。木簡の内容とともに今後の検討課題としたい。

本遺跡は、縄文時代において自然河川が存在したのち、弥生時代中期には水田開発が行なわれ、以後ほぼ間断なく水田耕作域となっていたものと考えられる。前述のとおり、周辺丘陵には磐城郡衙との関連が注目される製鉄遺構・遺物が検出されており、今回の木簡出土の意義もこれら遺跡のもつ総合的な性格の中で検討していかなければならぬと考える。

釈読にあたり、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

「いわき市教育文化事業団『いわき市内発見の木簡』(『発掘ニュース』三八 一九九三年)

(矢島敬之)

秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所編

『秋田城出土文字資料集Ⅱ』

秋田城跡調査事務所は一九八四年に『秋田城出土文字資料集Ⅰ』として、それまでに出土した漆紙文書と墨書土器の集成を刊行したが、今回それに続き、秋田城跡出土木簡と『Ⅰ』以後の漆紙文書をまとめた報告書を刊行した。

木簡は、一九八九・九〇年に行なわれた外郭東門付近の第五次調査を中心に三二一点が掲載され、漆紙文書とともに全点に写真と解説を付す。

『木簡研究』一・八・一二にも報告が掲載されたが、今回その全貌が明らかになった。

A4版 194頁、一九九二年三月刊

頒価 三〇〇〇円、送料 四五〇円

照会先 〇一一 秋田市寺内字大畑一一一

秋田城跡調査事務所

TEL 〇一八八—四五一—八三七